TANJUNG ALAI（タンジュン アライ）村　調査報告書

２００４年１２月８日

報告者　　坂　井　美　穂

東京地方裁判所　御中

第１　調査の概要

２００４年９月２２日、坂井美穂において Tanjung Alai（タンジュン・アライ）村を訪れ、視察調査を行った。調査方法としては、まず Tanjung Alai 村原告住民宅で、村落全体の状況を把握するために、住民数名から移転状況などに関する聞き取りを行い、続いて実際に住民同行の下で現地視察を行った。

第２　調査結果

以下、聞き取り結果とその後の視察結果に分けて、調査結果を示す。

１　住民からの聞き取り結果

２００４年９月２２日、原告住民 ANWAR SINARO 氏（アンワル・シナロ、男性、原告番号Ｃ２５４）宅にて、同氏および UMI 氏（ウミ、女性、原告番号Ｃ５７）から聞き取りを行った。以下はその結果である。

（１）昔の村での状況について

昔の Tanjung Alai 村での状況は、とにかく今の新しい村での生活とは明らかに違うものだった。昔は何も買う必要が無かった。ほとんどの住民が農業を営み、自給自足の生活をしていた。水牛を飼育する世帯もたくさんあり、水牛を世話するのにも何の苦もなかった。水は豊富にあり、食べるのにも苦労したことはなかった（UMI 氏）。

（２）移転過程について

１９７９年頃に、水力発電所が建てられる、という噂があった。しかし、その頃はまだ、ダムが建てられるらしい、という話だけで、移転しなければいけないという話はまだ無かった。１９８０年代初め頃、住民は移転しなければいけないという話を聞いた。

１９９０年代初め頃、補償金基準を決定する会議があった。住民が希望した基準額を政府側は拒否し、例えばゴムの木は２０００ルピア／本、ドリアンは４０

００ルピア／本、というように、政府のいい様に決められてしまった。これについては、Tanjung Alai 住民が納得しないまま、ＢＰＮ（国家土地局）のチームが現地にやってきて測量を行い、そのまま補償金が支払われた。このような政府側の一方的な措置に対し、当然、住民は政府に抗議したが、政府からはまったく無視され、政府の言い値のまま、補償金が支払われてしまった。

１９９４年に Tanjung Alai 村住民は一斉に移転したが、その際には丸４日間かかった。荷物運搬のためのトラックは、一世帯につき１回と制限され、その１回を超えるともちろんお金を払わなければ使用できなかった。また、その４日間のうちの２．５日分は、食事が支給されたが、内容はいたって質素なものであった。

（３）移転後の様子について

Tanjung Alai 村住民が新しい村落に移転して直面した現実は、非常に辛いものがあった。まず、用意されていた家屋を目の当たりにして、住民は、政府に騙されたと感じた。壁は木の薄い板で作られたもので、床は、土が露出してそのままになっているところも少なくはなかった。

井戸は、決まって３世帯につき１個が用意されただけで、しかも、その用意された井戸から水が出てくることはなかった。そのため、住民の中には仕方なく新しく井戸を掘る者がいたが、それは一部の富裕層に限られていた。

また、１世帯につき２ヘクタール用意されたゴム園には、ゴムの木は植えられていなかった。電気代は無料だといわれていたが、その約束が満たされたことはなかった。

（４）新しい村で思うことは

この新しい村では、自分の子供たちにまともに教育を受けさせることが困難であり、小学校を卒業すると、もう農業労働者として朝から晩まで働くということも少なくはない。

政府から用意された住居では生活できないため、新しく建て直した他人の家に間借りをせざるを得ない人もいる。それどころか、居・食・住全てを他人に頼る生活をせざるを得ない人たちまで存在する。皮肉にも、そういった人たちは昔の村では比較的裕福な人たちであったのにもかかわらず、移転後はそのような状況に追いやられているのである。

また、先祖代々はぐくまれてきた社会文化や慣習といったものは、新しい村では失われつつある。住民は政府に騙されたという気持ちでいっぱいである。

２　視察結果

聞き取りが終わった後、前述の ANWAR SINARO 氏、および UMI 氏の同行の下、現地視察を行った。結果は以下の通りである。

まず住民の生活家屋、生活用水、ＭＣＫの状況を把握するため、前述両氏の案

内により、UMI 氏の元住居を訪れた。村の中心部からそこまで行くまでの村道は、急斜面が多く、とても乗り物を利用できる状況になかった。さらに、そのような村道は､整備されておらず赤土がむき出しで土壌に岩石も含まれているため、雨が降ると非常に通行が困難であるような村道である。報告者自身も、実際にその村道を通行したが、かなりの時間を費やしてしまった。

（写真１）

（写真２）

写真１、２はその村道および村落内の様子である。写真１に見える藪は実際に政府から支給された住民の所有する畑地の一部、また写真２での道端の草むら内は、Tanjung Alai 村住民の屋敷地だという。このような場所が整備された痕跡はまったくなく、ましてや作物を植えても育ちにくい土壌であることは明らかである。

（写真３）

（写真４）

（写真５）

そのような村落内に UMI 氏（写真５）の屋敷地があった（写真３）。屋敷地はすでに雑草が生い茂っており、先ほどの赤土の村道から、さらに藪の中をくぐって抜けたところに、彼女の屋敷の跡（写真４）があった。 彼女曰く、政府が用意した住居の床の一部がまだ残っている、とのことである。

（写真６）

（写真７）

また、彼女の家屋跡の辺りを見回すと、この辺りの集落には、ほとんど以前の住民の生活の面影が無かった（写真６）。ここには、電線が張られてもおらず、使用された形跡すら無い電柱跡（写真７）が立っていた。UMI 氏の話によると、この電柱に電線が張られたことはなく、この地域に住民もほとんど住まなくなってしまったため、この電柱だけが残ってしまったという。

（写真８）

（写真９）

さらに、その近くには政府が用意した井戸（写真８、９）があった。以前は、つるべなどが建てられていたというが、誰も使わなくなったためいつの間にか無くなってしまったらしい。

（写真１０）

（写真１１）

（写真１２）

これらは、旧 UMI 氏宅から１５メートルほどしか離れていないところの屋敷

である（写真１０）。今は人は住んでおらず放置されたままになっているが、中に入ってみると、その粗末なまでの家のつくりがわかる。壁の板塀は隙間だらけで雨が降ると雨漏りがひどく跡に残るほどで（写真１１）、また床をみれば土やら石が露出している（写真１２）。

（写真１３）

この Tanjung Alai 村は、まず Payakumbuh（パヤクンブ）と Pekanbaru（プカンバル）をつなぐ州道沿いに点在する家屋群と、この国道からすこし奥に入ったところにある集落とに分かれて、主な住民が暮らしている。官庁や学校は、少し奥に入ったところの集落に存在する。

これらの集落に入るには整備されていない赤土の大きな傾斜の村道を通らないといけない上、この集落内でも地形上かなりの高低差があり、地理条件は不便である。

この集落の高台から、Tanjung Alai 住民のゴム園一帯を見渡すことが出来たが（写真１３）、農園や屋敷地と同じように、全く整備されていないように見られた。もちろん、移転当初ゴムの木は植えられておらず、未だもってゴムは住民の生計手段にはなっていない。そのようなことから、水産物の養殖を試みたり、国道沿いで喫茶店や食堂を経営してみたりする住民も多い。また、高齢の住民は、そのような仕事もできず、他人に依存しながら生活せざるを得ないという状況である。

以上